

1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像

高本 康子

1 はじめに

明治初期の日本におけるチベット情報としては、まず、小栗栖香頂『喇嘛教沿革』(1877)がある。同書は、一部の限られた専門家以外にも広く読まれていたとはいえないが、大正初期に至るまでチベット仏教に関する最も信頼に足る著作と見なされていた⁽¹⁾。また、明治20年代には仏教者の間に、後に「入蔵熱」⁽²⁾と呼ばれる関心の盛り上がりがあり、『反省会雑誌』、『教学論集』等仏教系の雑誌に、チベットに関する情報がしばしば登場した。

しかし、新聞という、大多数の日本人にとって接触可能な情報媒体に、まとまったチベット情報が初めて登場するのは、1900年からの10年間である。この期間には、1901(明治34)年に北京雍和宮の活仏阿嘉呼図克図(1871-1909)が来日、1903(明治36)年にはラサに到達した最初の日本人として、河口慧海(1866-1945)が帰国した。更に1905(明治38)年には、チベット入りの途上にあった東本願寺の能海寛(1868-?)がチベット・清境界地帯で殺されたという報道があり、1908(明治41)年にはスウェーデンの高名な探検家スヴェン・ヘディン(1865-1952)が、チベット調査の帰途初来日した。いずれも世論の関心を集め、新聞、雑誌には連日関連記事が掲載されている。これらの出来事を契機に、チベット事情が次々と新聞紙上で紹介されることとなった。現代に至るまで見ても、この期間のチベット関連記事数は際立って多く、従って1900年代は、一つの画期となっていると言える⁽³⁾。本稿は、以上に述べた状況下でいかなる情報が提供され、それらの情報がいかなる意味をもったのかを検討し、近代日本におけるチベット像の形成過程の一つとしてその位置づけを探るものである⁽⁴⁾。

2 阿嘉呼図克図来日報道

明治日本において、チベット関係記事が最初に集中し、チベット事情が新聞紙上で初めて紹介されたのが1901(明治34)年である。記事の過半は、来日した北京雍和宮の活仏阿嘉呼図克図⁽⁵⁾に関する報道が占めている。各紙は連日彼の動静を報じ、チベット事情の紹介記事を次々に組んだ。例えば『読売新聞』では、創刊以来初のチベット特集が連載されている。真言宗系の雑誌『伝燈』第243号は、当時の様子を「西藏熱」と形容している(「人心の反響」1901年8月13日付, p. 28)。彼の来日は明治日本において、一般の人々を巻き込んだものとしては最初のチベット・ブームを引き起こしたと言えるだろう⁽⁶⁾。

一連の報道において阿嘉呼図克図は、北京雍和宮で生活するモンゴル人で、チベット仏教の活仏とされるが、注目すべきはこの時、清でもモンゴルでもなく、チベット特集が組まれたこ

——1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像——

とである。その背景には、義和団事件後、チベットの帰趨によっては、日本が最も注目する満州還付問題をめぐる情勢に重大な変化が生じる可能性があることが報じられていたことが挙げられる。特に、ロシアへのドライラマの使節派遣の第二回目（同年6月）と、ロシアによるチベット独立の提案についてのニュースが、ほぼ同時期に報道されたため、「喇嘛教貫主の来朝に関して、世人の注意を惹て居るものハ露国対西藏の問題である」（読売「喇嘛教貫主の上京」同年7月20日付社説）というように、ロシアの動きに敏感になっていた日本人の視線を、一時的にせよ、結果としてチベットへと招来することとなったと言える。加えて、「西藏喇嘛の懐柔は満蒙の経営上、欠くべからざる一要事」（時事「早晚起こるべき西藏問題」同年7月22日付）等、満蒙地域におけるチベット仏教の政治的影響力に、読者の注意が喚起されている。これも、チベット仏教の権力の淵源地としてチベットが注目された理由の一つと思われる⁽⁷⁾。

チベットについて、報道に共通する点の第一は、チベットが日本にとって「直接なる影響を及ぼすべきに非ざる」（大朝「西藏問題」同年7月18日付社説）、「無知無力の蛮邦」（大朝「露国と西藏」同年7月17日付）であるとする点である。チベットはあくまで、日本外交の世界地図においては「亞細亞の大局」を考える場合にのみ視野に入ってくる、「風馬牛も相及ばざるの地」（以上前掲大朝「西藏問題」）であり、同時に、清、英、露という大国間の駆け引きに利用される無力な小国と捉えられていたと言える。

しかし、直接的な関係はないとされる一方で、チベットについて、日本が列強より有利な条件を持っていることが頻繁に強調される。ここで繰り返されるのは、「同教同文」、「同人種」という言葉である。例えば、義和団事件下の北京における日本軍の行動に対し、阿嘉呼図克図の感謝の言葉が、以下のように伝えられている。「個人としてハ更に敵心なく友人の如き有様であつたのです是ハ同人種同仏教の国であつたからと思ひます」（読売「昨日の錦輝館貫主余聞」同年7月29日付）。但し、諸記事においてこのように、日本との共通項が強調される地域が、阿嘉呼図克図に関連して出現する地域名のうちのどれにあたるのか、大部分の場合明言されていない。

しかしこれは、大陸への日本進出が語られる場合、いわば異教異文とも言える欧米人に対置されて日本の優位を語る場合の常套的な表現であり、明治初年以降いわゆる「大陸経綸」に関する記述、例えば1892（明治25）年の根津一編『清国通商綜覧』等に見られるものである⁽⁸⁾。従って、ここにおいても、清、チベット、モンゴルいずれもが大陸の一部に属する地域であるという理由で、このような表現が踏襲されたにすぎないと思われる。このような表現が適切であるかという点に関する顧慮の欠如は、これらの記事においてそのような顧慮がほとんど意味をもたなかったということも示唆していると言えるだろう。

報道に共通するものの第二は、チベットを「世界の秘密国」（東日「西藏雑談」同年7月23日付）等とする表現である。ここにおいて、チベットに関する重要な情報の一つが、「内部の事情が全く不明な地域」というものであったことが読み取れる。なお、仏教系の雑誌においては明治20年代後半からこの表現が見られる⁽⁹⁾が、新聞紙上において使用されたのは、阿嘉呼図克図来日報道がほぼ最初であると考えられる。この表現は以後、第二次世界大戦期まで、チベットに言及される場合の固定的表現となっていく。

共通点の第三は、入蔵に挑む日本人、特に東本願寺から派遣されて中国側からチベットを

目指していた能海寛の消息である。紹介されるのは、チベット人が排他的な性質であることと、高原や大河などの地理的障害の2点である。例えば『読売新聞』『西藏雑談』では、チベット人は「例の通り、外来の人間ハ悉く鬼か蛇のやうに思つて居る」人々で、能海が寺本婉雅(1872-1940)とともにチベット領域内のボタンに日本人として初めて到達した時の道中は、険しい山や急流を越え強盗が多い地域を通過する非常に危険なものであったと伝えている(同年7月22日付)。この2点が詳しく紹介されたことは、即ち、チベットがいかに厳しく閉ざされた、外部から進入し難い地域であるのかが記述されていくことでもあった。例えば、『時事新報』でチベット特集が組まれるにあたって、「鎖国」がテーマに選ばれていること(「西藏鎖国の理由」同年7月29日付)は、この「鎖国」がチベットの重要な特徴の一つとみなされていたことを、明らかに示すものであると言える。

第四は、チベットが「文明」の光届かぬ「未開国」(大朝「西藏事情」同年7月10日付)であり、そのチベットで人々が篤く信奉するチベット仏教が「迷信教」(読売「喇嘛教」同年8月17日付)であるとされる点である。例えば阿嘉呼図克図との会見記である「文明東漸の実例(喇嘛貫主と舞踏会)」(読売同年7月25日付)では、来日中の米海軍少将を「二十世紀の文明を代表するもの」とする一方で、阿嘉呼図克図をその「文明」に「相反せる」存在とし、かつ、「西藏を代表するに適當のもの」とした。この記述の背景には、義和団事件を契機に「始めて列国と対等の立場を獲得」(外務省1966, 196)し、「文明」国の一員としての日本を強く実感した日本人の、大陸への視線のありようが反映しているのが見て取れよう。

諸記事で、チベット仏教については、更にもう一点の共通点が見られる。すなわち、その教義について、日本の真言宗もしくは、記事中の表現では「密教」との類似を強調する点である。これは新聞紙上だけではなく、前出の真言宗系雑誌『伝燈』社説、つまり「密教」についての知識を持つ人々の記述にも共通する(前掲第243号, pp. 2-3)。これには、いかに広くこのような捉え方が共有されていたか、その一端を見ることができると言えよう。ここには、小栗栖香頂『喇嘛教沿革』で強調され現代にも根強く残る、チベット仏教を「密教」とするイメージが観察される(山口1987, 62-64; 高本2008)。

以上のように、阿嘉呼図克図に注目が集まる中でなされた報道は、当時としてはそれまでチベットに関心があった限られた人々以外の日本人に、チベットについてのまとまった情報が提供される、初めての機会となった。結果としてこのチベット紹介によって初めて、無力な小国であり、閉ざされた地域であり、文明に属さぬ「秘密国」というように、大まかなチベット像が特徴づけられることとなったと言える。

3 河口慧海帰国報道

次に注目すべき報道はこの2年後、1903(明治36)年の、河口慧海⁽¹⁰⁾のチベット旅行に関する記事である。マスコミはこれを非常にセンセーショナルに取り上げた。河口に注目が集まった理由としては、一つには、日露戦争開戦前夜のこの時期、ロシアのブルジュワスキー(1839-1888)や前出のヘディンなど、欧米の著名な専門家が軒並みラサ入りし失敗していた中で日本人の快挙であったことと、英印軍のラサ派遣の前後で、チベットについての海外ニュー

—1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像—

スが多かったことが挙げられる。このような状況下で、彼の帰国から始まった新聞報道と、翌年にかけて行われた河口の各地での講演、日本人初のチベット旅行記『西藏旅行記』(1904)の出版といった一連の出来事が、それまでにない大量のチベット情報の発信となった。現代に至るまで見ても、それは空前絶後の規模であったと言える。例えば戦後における新聞報道においては、1952(昭和27)年から始まった日本山岳会のマナスル登山に関する一連の報道⁽¹¹⁾があるが、それを遙かに凌駕する量であった。

1903(明治36)年5月20日、河口は神戸に帰着する。この前後から新聞各紙に河口のチベット旅行談が掲載され、同年11月までの間に8紙12本に及んだ。5月31日には早くも、『時事新報』、『大阪毎日新聞』における旅行談の長期連載が始まっている。この二紙の連載は、河口の口述に基づくもので、『時事新報』では「世界の秘密国」と題し1903年5月31日-10月15日の計138回、『大阪毎日新聞』では「大秘密国の探險西藏経歴談」として同年5月31日-10月16日の計139回連載された(高山1999, 88-97)。

この二紙の連載において特に注目すべきは、連日のように、大判の挿絵が添えられたことである。阿嘉呼図克図来日報道にも挿絵はあったが、単発的で点数も限られていた。それに対し、これらの挿絵は、河口の「口述」による文章、即ちその活写のさまをしばしば「講談」に擬せられた文章⁽¹²⁾が視覚化されたものであり、しかもまとまった量が連続的に掲載されている。従って専門家ではない一般の日本人に対し、その興味の喚起と情報伝達における簡便さという点で、遙かに大きな効果を持ったことが推測される。

記事内容の第一の特徴は、「九死に一生」(大毎「大秘密国の探險西藏経歴談」1903年6月4日付)といった言葉で形容される、いかに危険な状況にあったかを伝える記述が多くみられる点である。例えば入蔵の過程においては、彼は日本人であることを隠し、単独でヒマラヤを越え、強盗などに脅かされつつラサを目指した。記事では、彼が次々に直面する非常に危険な状況の描写が連続し、これらを彼が自身の力によって乗り越えていくさまが、詳細に記述された。

第二には、河口を含め日本人全体が、チベット人よりも優れた能力や知識を具えているとされる点である。その典型的な例は、山中の市場で目にしたチベット人の計算方法について「我々が一時間で出来る勘定を彼等は余程上手な者四人掛りで確に三日も潰さねばならぬといふ如何にも遅鈍な事夥たゞしい」(大毎「大秘密国の探險西藏経歴談」同年6月16日付)とする記述である。

チベットに対してこのような属性、すなわち閉鎖性、「未開」・「野蛮」性を付与する態度と、その具体例としての、厳しい鎖国、地理的障害、チベット人の無知といった情報は、阿嘉呼図克図来日報道において既出のものである。これらに加え、河口の旅行記事には、新しい情報も多く登場した。それが「事实は小説より奇なり」(大毎「予告!河口慧海師口述西藏経歴談速記」同年5月28日付)等と表現されたもので、これにはまず、チベットの自然を「靈妙な仙境」(時事「世界の秘密国」同年6月14日付)等、非常な美観として描写するものがある。例えば聖山カイラスやマナサロワール湖、出蔵の途上におけるチョモラリの「絶景」(大毎「大秘密国の探險西藏経歴談」同年9月20日付)等であり、いずれもあくまで善美なるものとして記述されている。

これに対して、同様にこの世のものとは思えない、信じ難いものとはされてはいるが、善美

どころか、グロテスク極まりないものとして描かれるのが、「奇絶驚絶」（大毎前掲「予告！河口慧海師口述西藏経歴談速記」）と表現されるチベット人の習俗である。これは、河口が「残酷」（時事「世界の秘密国」同年8月7日付）と評する鳥葬の習慣に関する記述に代表される。しかし、このようにチベット人を「未開」とし、鳥葬を「残酷」と見る記述は、河口独自の見解というよりは、阿嘉呼図克図報道にも見られた「文明」優越の感覚を、常識として河口も他の多くの日本人と同様に持っており、また自身が堅く戒律を保持する仏教僧であったことの、自然な結果であったと言うべきと思われる⁽¹³⁾。

結果として、河口の旅行記事の記述を通じて描き出されたのは、「坐ろに西遊記を読むの感あり」（時事「西藏国内探検談掲載予告」同年5月28日付）等と表現される、日本人が困難を切り抜け、「欧米人」（大毎「西藏探検談（一）」同年5月21日付）にひけをとらない快挙を成し遂げていくさまであったと言えよう。河口の旅行記事が、「魂飛び肉躍らしむ」、「空前の大活劇」（大毎「大秘密国の探検西藏経歴談」同年6月4日付）と表現されたことに、それは明瞭に読み取れる。チベットは、この「活劇」を鮮やかに引き立てる場所、即ち、「奇聞」（前掲大毎「予告！河口慧海師口述西藏経歴談速記」）に満ちた、「秘密の宝庫」（上掲大毎「西藏探検談（一）」）として表現された。結果としてこれらの記事は、1901年の阿嘉呼図克図来日報道によって方向づけられたチベット像に、経験者の直話という信憑性のある詳細で大量の情報を以て肉付けする役割を果たしたと言えよう。

4 能海寛横死報道

次に注目すべきは、1905（明治38）年の能海寛の横死を伝えた報道である⁽¹⁴⁾。河口帰国まで、新聞や雑誌に、入蔵に挑む日本人として名前が挙がっていたのは、河口ではなく能海寛であった。阿嘉呼図克図報道において、チベットへの能海の挑戦の様子を通じてチベット事情の一端が語られていったことは、すでに述べた通りである。

能海は1899（明治32）年のバタン到達後、現地の状況悪化のため四川省内に引き返した。以後何度か入蔵を試みたがいずれも成功せず、1901（明治34）年4月の雲南省大理からの書簡以降消息不明となる。その後、能海の父に、能海が「西藏界」（「能海寛氏の生死」『東洋哲学』1905年9月5日付、p. 564）で現地住民に殺された、という情報が伝わり、これがきっかけとなって1905（明治38）年7月22日付以降の東京・大阪各紙は一斉に、能海寛の受難と、彼の履歴等について特集記事を組んだ。しかし一ヶ月後、これが誤報であったと報じられる。以来能海の死の真相は、現在に至っても不明である⁽¹⁵⁾。

一連の報道では、「満州軍軍政部長井戸川少佐」（万「西藏探検家能海寛の最後」1905年7月22日付）⁽¹⁶⁾なる人物が入手した伝聞情報が情報源とされるが、その日付や詳細な地名は記事中に示されない。しかし、報道において一貫して、「西藏探検家」能海が「西藏界」で殺された、とされている点に注目される。すなわち、彼の名前、彼の死が、そのままチベットという地名に結びつけられていっていると言える。同様にまた、彼の死がいずれも、「縦容土人が獐猛なる凶手に斃れた」（上掲万「西藏探検家能海寛の最後」）というエピソードとして語られていることも共通している。例えば『読売新聞』では以下のように報じられている。

辛酸拮据漸く西藏国境に至り一旅寝に投せしに遂に土人の看破する処となり激怒憤懣し白刃を擬して君に迫りしかバ暫時の猶予を乞ひ立つて白壁に麗々しく『大日本帝国石見国那賀郡波佐村能海寛此処に於て土人に虐殺せらる』と書して座に就き瞑目すれば閃めく毒刃の下頭ハ千秋の恨みを載せて落ちぬ（「能海寛氏の最後」同年7月23日付）

彼の死の記述に見られるこのような傾向は、既に当時指摘されている。例えば彼の死が誤報であったことを伝える一月後の雑誌記事には、「壁に辞世を書き付くる所など、何やら演戲的の感あり、其の間獐悪なる土人が虐殺の刃を猶予せしが如き、又宿屋の主人が壁上の落書を其儘に為しおきが如き、余程小説的」（前掲「能海寛氏の生死」, p. 565）とある。

しかしここで注目すべきは、この「演戲的」、「小説的」な点である。この前年に大きな関心を持った河口の旅行記事が「魂飛び肉躍らしむ」、「空前の大活劇」（前掲大毎「大秘密国の探險西藏経歴談」）であったこと、そしてその中ではチベットが、その「活劇」にふさわしい場所として描かれていたことを考えると、能海横死は、チベットに関連する出来事としてのリアリティを得るために、まさしく「活劇」の中的一幕、それも河口旅行記事で語られた「活劇」の舞台チベットにふさわしい形で語られなければならなかったのだと思われる。実情がどのようなものであったのかが曖昧なまま、彼の「横死」がチベットに結びつけられ、かつ、その語られ方が「演戲的」、「小説的」であることには、能海に関連する場所と言えバチベットであり、チベットと言えバ河口の「空前の大活劇」という連想が、少なくとも新聞記事の書き手にあったことの一端が示されていると言えよう。これは例えば、能海横死報道の直後、鹿島桜巷『世界の秘密国』三部作（1906）⁽¹⁷⁾のように、少年小説の中に、物語の背景として河口の旅行記をそのまま引用し能海を主人公に設定したようなものが出現していることにも、その一例を見てとることができるだろう。このような能海像を通して、チベットには、「世界中の神秘国として幾多探險家の生命を犠牲とせる西藏」（万「西藏探險家能海寛最後の手紙」1905年7月24日付）、すなわち、容易に進入できない危険な場所という意味づけが改めて行われたと言える。

5 ヘディン来日報道

19世紀末から20世紀半ばにかけて、いわゆる中央アジアを中心に地理的調査を行い、その旅行記でも広く知られるスヴェン・ヘディン（Sven Anders Hedin）⁽¹⁸⁾の来日は、能海横死報道の3年後、1908（明治41）年の出来事である。彼の来日をめぐる報道が注目される理由は、記事の量が河口帰国時の報道に次ぐ規模であったことに加え、河口にはなかった学術的権威を十全に具えた人物を情報源とするチベット事情紹介であったことにある。ヘディンが持つ学術的権威と、その社会的地位の高さに対する、当時の世論の注目は、例えば、その世界的な名声が「世界の大探検家」（読売「世界の大探検家」1908年11月9日付）、「世界の学者」（万「瑞典公使と我官吏」同年11月18日付）等というように強調され、かつ、調査の成果の大きさが「実に世界の学界に対して一大光明たりしなり」（上掲読売「世界の大探検家」）等と、繰り返し報道されていることに、十分に見て取ることができよう。更に、日本滞在中に明治天皇に拝謁して勲一等瑞宝章を授与されたことは、彼の社会的地位の高さを日本社会に改めて示すことになったと思われる。

——1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像——

ここで注目されるのは、ヘディンの見聞として報道されたチベット事情の内容が、河口の旅行記事と同じ特徴をもつことである。即ち、旅程における危険と、チベットの地域的特徴として「野蛮」が強調されること、また事実とは信じがたい習俗についての記述が連続することである。両者の記述に見られるこのような類似は、河口の旅行記事が「空前の大活劇」(前掲大毎「大秘密国の探險西藏経歴談」)等とされ、それゆえに西遊記に擬されたと同様に、ヘディンの旅行の記事もやはり「活ける冒険小説」(万「活ける冒険小説」1908年11月17, 18日付)等と形容されていることに象徴される。

しかし河口の記事におけるチベット像が「伝奇的」(大朝 内藤湖南「河口慧海師の入蔵談に就て」1903年6月22日付)等とされ、東京地学協会など一部の人々には架空のものと言うに近い否定的な印象を与えたのに対し⁽¹⁹⁾、ヘディンの名の下に流布された、この報道におけるチベット像は、そのような評価を全く受けていない。これは、当時両者が置かれていた立場や身分を考えれば当然とも言えるが、しかしそれだからこそ、この報道は、河口の旅行記事で伝えられたチベット「奇聞」(大毎前掲「予告！河口慧海師口述西藏経歴談速記」)について、ヘディンの情報の具えるデータとしての厳密さと、学術的・社会的権威をもって、その信憑性を保証する結果となったと言えよう。河口のチベット像をいったん退けた人々は、ヘディンの探検談を通して結局それを受け入れたと言えるのではないかと思われる。日本人のチベット観へのヘディンの影響としては、これが最大のものであったと考えられる。

6 おわりに

以上のように、1900年代の新聞報道を見る限り、阿嘉呼図克図来日報道で方向付けられたチベット像は、河口の旅行記事によって肉付けされ、能海寛横死報道とヘディン来日報道によって、その現実性への保証をされつつ、いわば強力に描き直されていったと言えるだろう。1900年代のチベット事情紹介記事には、河口の旅行記事におけるチベット像が、重要な参照例の一つとなっていくその過程を見ることができると言える。

略号表

大朝	『大阪朝日新聞』
読売	『読売新聞』
大毎	『大阪毎日新聞』
万	『万朝報』
東朝	『東京朝日新聞』
時事	『時事新報』
東日	『東京日日新聞』

文献表

飯塚 勝重

1998 「能海寛と長江三峽行」『白山史学』34, pp. 18-37。

2003 「能海寛 求法の軌跡—東京修学時代の日記を中心に—」『研究年報』38, pp. 37-46。

——1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像——

石田 幹之助

1942 『欧米に於ける支那研究』創元社。

岩村 忍

1939 「附録 中央亜細亜探検とスウェン・ヘディン」ヘディン『中央亜細亜探検記』富山房。

江本 嘉伸

1993 『西藏漂泊』上巻, 山と溪谷社。

奥山 直司

2003 『評伝 河口慧海』中央公論新社。

小栗栖 香頂

1877 『喇嘛教沿革』石川舜台。

外務省 編

1966 『小村外交史』明治百年叢書, 原書房。

鹿島 桜巷

1906 『世界の秘密国』『無底湖の秘密』『不死の霊窟』東京大学館。

片山 章雄, 白須 浄真 編

1998 『大谷光瑞師と中央アジア探検—その時代性をめぐって—』大谷記念館。

金子 民雄

1982 『ヘディン 人と旅』白水社。

1988 『ヘディン伝』中央公論社 (1972 新人物往来社)。

1989 「解説」橘瑞超『中亜探検』中央公論社。

河口 正

1961 『河口慧海』春秋社。

河口 慧海

1904 『西藏旅行記』上下, 博文館。

木村 肥佐生

1981–1983「成田安輝西藏探検行経緯」『アジア研究所紀要』8–10, (上) pp. 33–87, (中) pp. 139–192, (下) pp. 183–238。

高本 康子

2005 「能海寛横死報道と日本人のチベット観」『石峰』10, pp. 6–12。

2007a 「阿嘉呼図克図来日報道に見るチベット観」『歴史』108, pp. 30–52。

2007b 「河口慧海口述チベット旅行記事と日本人のチベット・イメージ」『黄檗文華』126, pp. 262–282。

2007c 「ヘディン来日報道に見るチベット・イメージ」『国際文化研究』13, pp. 209–221。

2008 「明治期の日本仏教における「喇嘛教」情報受容に関する一考察」『印度学仏教学研究』57, pp. 555–558。

シュラーキントヴァイト

1958 『西藏の仏教』楠基道訳, 永田文昌堂。

秦 永章

2005 『日本涉藏史』北京: 中国蔵学出版社。

隅田 正三

1989 『チベット探検の先駆者求道の師「能海寛」』波佐文化協会。

高山 龍三

1999 『河口慧海一人と旅と業績』大明堂。

2002 『展望 河口慧海論』法蔵館。

2001–2008「国内の著作にみる河口慧海」『黄檗文華』120–127, (1) pp. 30–44, (2) pp. 126–144, (3) pp. 165–180, (4) pp. 243–258, (5) pp. 65–102, (6) pp. 202–207, (7) pp. 220–244, (8) pp. 241–263。

——1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像——

寺本 婉雅

1974 『蔵蒙旅日記』横地祥原編、芙蓉書房。

中村 保

1998 「横断山脈に消えた能海寛」『石峰』5, pp. 1-50。

日本山岳会

1954 『マナスル 1952-3』毎日新聞社。

1958 『マナスル 1954-6』毎日新聞社。

根津 一 編

1892 『清国通商綜覧』日清貿易研究所。

羽溪 了諦

1933 「明治仏教学者の海外進出」『現代仏教』105, pp. 97-108。

深田 久弥

1964-66 「解説」『ヘディン中央アジア探検紀行全集』全11巻、白水社。

福田 宏年

1984 「訳者あとがき」ヘディン『シルクロード』下巻、岩波書店、pp. 251-261。

万代 剛

1998-2001 「チベット行100年 能海寛の旅に学ぶ」『山陰中央新報』。

山縣 初男

1907 『西藏通覧』丸善。

山口 瑞鳳

1987 『チベット』上巻、東京大学出版会。

Lopez, D.S.

1998 *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*. Chicago: University of Chicago Press.

Bishop, P.

1989 *The Myth of Shangri-La: Tibet, Travel Writing and the Western Creation of Sacred Landscape*. London: Athlone Press.

Okuyama Naoji

“The Tibet Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era”. In *Images of Tibet in the 19th and 20th Centuries*. Ed. M. Esposito. Paris: pp. 202-242.

注

- (1) 例えば楠基道は、大正初年の研究状況を回顧し、当時におけるチベット仏教に関する信頼すべき日本語資料として、小栗栖香頂『喇嘛教沿革』と、山縣初男『西藏通覧』(1907)を挙げている(シュラーキントヴァイト 1958, 1)。このことにも『喇嘛教沿革』の存在の大きさがうかがえよう。
- (2) 河口慧海について精査した奥山直司が、僧侶たちのこのチベットへの関心の高まりを、「入蔵熱」と形容している(奥山 2003, 104-110)。だが奥山氏のご教示によれば、羽溪了諦が、明治20年代後半の仏教者によるこの「西藏への冒険的潜入」が集中的に試みられた時期を、このように名付けていたという(羽溪 1933, 103)。
- (3) 例えば『読売新聞』CD-ROM版のチベット関連記事数を見ると、1903-4年は、創刊以来1945年までの期間において記事数が突出して多い時期の一つであり、最多の1912年に次ぐ。チベット事情紹介記事数としては最多となる時期でもある。
- (4) チベットと日本人の関わりについては従来、研究史を除くと、日本人入蔵を中心に研究がなされてきた(木村 1981-1983; 山口 1989; 高山 1999; 奥山 2003)。本稿は従来の研究において関心が薄かった、日本人に広く共有されたチベット観という視点から、この関わりについての検討を試

—1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像—

- みるものである。欧米においては1990年代前後からすでに、このような視点からチベット・イメージの形成と変遷を考察した論考が書かれており、Bishop (1989), Lopez (1998) がその代表的なものであると言える。
- (5) この来日についてはまず、山口 (1987, 81-82) と奥山 (2003, 235) が、1901年に阿嘉来日が実現したこと、この実現が、東本願寺の僧侶であり、当時陸軍第五師団付の通訳として北京滞在中であった寺本婉雅の活動によるものであることの2点に言及している。比較的詳細に阿嘉来日を取り上げているのは、寺本 (1974) と本文前掲『伝燈』243号社説「喇嘛僧来朝に就ての所感」(113頁)の記述に主に依拠した秦 (2005, 100-103) である。報道の内容を含めた阿嘉呼図克図来日に関する詳細については、高本 (2007a) がある。
 - (6) その関心の集中の一端は、「日本の花形」(『喇嘛教貫主彙報』『仏教』第174号, 1901年8月15日, 251頁), 「独り宗教界のみならず世間一般喇嘛僧の風説のみに御坐候」(『毎月通信』『中央公論』1901年8月号, 69頁) と報じられていることにもうかがえる。
 - (7) 例えば雑誌『太陽』には、阿嘉呼図克図来日を機に「西藏問題」と題する特集が組まれており、この記事本文冒頭に「根原を西藏に発する喇嘛教貫主が我国に来朝」とある(第7巻第9号, 1901年8月5日付, p. 217)。この記述も、チベット仏教の淵源地としてチベットが注目されたことを示す一例であると言えよう。
 - (8) 『清国通商綜覧』は、中国各地での民間人による見聞の結果が結集された情報集として、明治日本において最初期のものである。同書「緒言」には、「欧米」について、「其俗異其土遠く」「遠くして且つ殊俗なる」とする一方で、清について、「其人情風俗は頗る相類し嗜好生活亦相似たり」とし、この関係を日清通商の上での「天然関係の幫便」と強調する記述が見える(根津 1892, 3-8)。
 - (9) 仏教者たちの記述においては、既に1895(明治28)年に「秘密国」が使われているのが見える。例えば古河老川 (1871-1899) は、「此西藏の国たる、古今東西の一大秘密たり」, 「一大秘密国」等の表現を使用している(古河 1895, 7-8)。
 - (10) 河口慧海に関する先行研究として代表的なものには、高山 (1999; 2002), 奥山 (2003) が挙げられる。河口慧海研究の概要については、高山 (2001-2008) に詳しい。河口のチベット観や、河口が日本人のチベット観に与えた影響などを考察したものは少ないが、河口慧海のチベット仏教観、チベット文明観への言及(高山 1999, 75-76, 84-85), 二紙の連載と日本人のチベット観の関係についての調査(高本 2007b), 河口慧海のチベット旅行記が持った影響力についての指摘(Okuyama 2008, 203-210) がある。
 - (11) このマナスル登山は、1952-56年日本山岳会によって行われたものである(同会 1954; 1958)。この登山活動中には、後援の毎日新聞社はじめ、新聞各紙に、マナスル登山関連の特集記事が多数掲載された。例えば『毎日新聞』には、踏査隊派遣の1952年9-12月に、特集連載記事を含む計58件の記事がある。
 - (12) 例えば河口を「西藏の講談師」と呼ぶ記事がある(東日「近事片々」1903年5月30日付)。
 - (13) このような慧海の態度について、奥山直司は、それを「珍奇な題材に加えて、それを当時の日本人の倫理感覚でずばずば切ってゆく爽快感」と表現し、これが河口旅行談話が人気を得た要因の一つであったと指摘している(奥山 2003, 212)。
 - (14) 能海に関しては、近年、特に能海寛研究会機関誌『石峰』が創刊された1995年以降、調査研究成果が蓄積されてきた。2004年には、地元金城町に残された膨大な遺品を総括した『能海寛著作集』の刊行が開始されるに至った。従来の能海研究は主に、能海個人の事績を詳細に解明しようとするものであり、その嚆矢は隅田 (1989) である。その他、飯塚勝重による日記類の分析(飯塚 1998; 2003), ジャーナリストによる調査(江本 1993; 1999; 万代 1998-2001) 等がある。能海寛横死報道については高本 (2005) がある。
 - (15) 能海の最後については1923年7月、京都発行の仏教系新聞『中外日報』紙上に、寺本婉雅の署名が付された「故能海寛君遭難の真相 支那雲南省クーソン族の惨殺」という記事が掲載された

——1900年代の新聞記事に見る近代日本のチベット像——

- (8, 10, 11 日付)。しかしこの記事の真偽は現在でも不明であり、前述の能海寛研究会では、能海の消息を明らかにしようとする様々な試みが続けられている。その最大の成果は、中村(1998)であるといえるだろう。
- (16) この「井戸川少佐」は、陸軍士官学校 1890 年卒で、日清戦争前後に清国応聘将校として四川省成都で清側の軍事顧問を務め、日露戦争中は特別任務班として満蒙地区で特殊工作に従事した井戸川辰三(1870-1943)を指すと思われる。
- (17) この三部作は、第一作『世界の秘密国』、第二作『無底湖の秘密』、第三作『不死の霊窟』から構成される連続的な物語である。著者鹿島桜巷(本名鹿島淑雄, 1878-1920)は、『いはらき新聞』、『報知新聞』の記者として活動した人物である。
- (18) ヘディンに関する先行研究としては、膨大な関係書簡その他の資料を調査した金子(1988)の他、ヘディン著作の翻訳者による解説がある(深田 1964-66; 福田 1984; 岩村 1939)。また、石田(1942, 407-427)が欧米の中国研究の中にヘディンを位置づけ、その学術的業績を高く評価している。1908 年の来日については、まず金子(1982, 201-218)に、その経緯について詳細な記述がある。また、大谷探検隊研究においてヘディンの西本願寺訪問にしばしば言及される(片山, 白須 1998, 4, 13; 金子 1989, 242-245)。また来日報道については高本(2007c)がある。
- (19) 東京地学協会の機関誌『地学雑誌』等に河口のチベット行への言及はない。また「地学協会の書記」と称する人物が、河口の記事が虚偽であると新聞社に抗議したが、河口の反論によって抗議を取り下げた、ということがあった(河口 1961, 135-137)。これについては、奥山直司の詳細な言及がある(奥山 2003, 218-222)。